

# 令和元年度第2回平泉町総合教育会議

日時：令和元年10月23日（水）

午後1時30分

場所：委員会室2

## 次 第

- 1 開 会
- 2 挨拶 平泉町長
- 3 協 議  
（1）就学前からの教育について
- 4 その他
- 5 閉 会

令和元年度第2回平泉町総合教育会議出席者名簿

区分	職名	氏名
構成員	平泉町長	青木 幸保
	平泉町教育委員会教育長	岩 渕 実
	平泉町教育委員会 教育長職務代理者	本 澤 京子
	平泉町教育委員会委員	三 澤 恒
	平泉町教育委員会委員	山 平 功二
	平泉町教育委員会委員	三 浦 英子
関係職員	平泉町立平泉小学校長	佐々木 秀善
	町立幼稚園長（兼平泉保育所長）	佐 藤 京子
	長島保育所長	千 葉 よし子
	町民福祉課長	千 葉 多嘉男
	保健センター主幹	穂 積 千恵子
	適応支援相談員	阿 部 ひとみ
事務局	教育委員会事務局教育次長	千 葉 幸一
	教育委員会事務局教育次長補佐	千 葉 数馬
	教育委員会事務局指導主事	佃 智之

## 令和元年度第2回平泉町総合教育会議

日時：令和元年10月23日（水）

午後1時30分

場所：委員会室2

（千葉教育次長）

皆さんお忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。予定時刻より少々前ですが皆さんお揃いですので、会議の方を進めさせていただきたいと思います。

それでは、令和元年度第2回平泉町総合教育会議を開会致します。

初めに、青木町長より挨拶を申し上げます。

（青木町長）

それでは、大変ご苦勞様でございます。元年度に入って2回目の総合会議ということになります。特に前回は、就学前からの教育についてそれぞれの面から等々、お話をいただいたところでございます。今回は、更に前回言い足りない分、もう少しちょっと深めてお話をしたらどうかという部分まで来たという風に記憶しております。今回は、更に中身をもっと少し深掘りしながら、今後の対応等、進め方においてもお話を承りたいと思いますし、お話をしたいという風に思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。大変ご苦勞様です。どうぞ宜しくお願い致します。

（千葉教育次長）

続きまして、3の協議ですが、進行につきましては、岩淵実教育長にお願いします。

（岩淵教育長）

それでは、進行させていただきます。まずもって本日は、お忙しいところすべての委員の方々にお集まりいただきまして大変ありがとうございました。時間の目途ですが1時間半ということで、3時を目途に終了するようなかたちで進めて参りたいとそのように思います。宜しく申し上げます。先ほど、町長の方から第1回目のこの会議についてのことが話がありましたけれども、それを受けて2回目ということですので、できれば少し方向が見えるようなかたちに話し合いが進められればよいなとそんな風に思っているところであります。

資料に前回の会議で各教育委員さん、あるいは校長さん、課長さん、そういった方々から、お話をいただいたものの概要をですね、まとめております。いや、もう少し私は話したはずだという部分もあるかという風に思いますけれども、おおよそ、それぞれの方からご意見をいただけたと。実態、それから課題や問題というそういったようなことをそれぞれの立場、立場からお話いただいたわけですがそうしたことを元にしながらいよいよ今日の会を進めて参りたいという風に思います。その進め方ですが、まずもって前回たくさんお話をいただいたわけでありましてけれども、もう一度、それぞれの立場でもって振り返ってみて、この辺については、是非、お話をしておいた方がいいというようなことがあればそういったことを一言

ずつでも結構ですので、それぞれの方からお話いただいたことを前段にしたいと思います。

それを受けて、張り出されたものに基づいて、来年度に向けてと言ったらいいかと思いますが、どのように格言化していくかということについて話合いが進めば有難いなとそんな風に思っているところがございますので、どうぞ、短時間ではありますけれども宜しく願いしたいと思います。それでは、口火を切っていただくのは、ひとみさんに口火を切っていただきたいと思います。前回、最後にかなり広範囲に渡る話が出まして、私は聞いていて、あ、そういうこともあるのかということで、新たなことを感じたところもあるわけですが、そういうことでひとみさんの方からまず、この間の続きと言ってはあれですけれども、少し言い足りないこともあるかと思っておりますので、お話をいただいて、その上でそれぞれの方から前回お話した部分も含めてまた話をさせていただきたいと思っておりますので、それでは宜しくお願い致します。

(阿部適応支援相談員)

一番ですね。それでは、先に話させていただきます。適応相談員の阿部ひとみです。今日、お話することを整理して参りました。前回の会議を経た後、私の中でこれ不安だなと思うところを洗い出してみました。いくつか話したいと思います。まず、家庭内というのは密室であるなということを感じています。実生活は、見えませんよね。お話は聞くけれども、実生活は見えないというところで家庭内は密室。だから、私たち支援者は目を向ける必要があるのかなと感じています。

2つ目です。子育ては連鎖しているなと感じています。親御さんは、自分が育てられたようにしか、育てられていないような気がしてなりません。それは、育て方を知らないからなのか。分からないからなのか。いやいや、そうではなくて、ただ忙しいからという言葉のもとに現実から逃げているのか、いろいろな事情があるかもしれませんけれども子育ては連鎖しているなという風を感じています。

3つ目です。他者と関わらない保護者が増えてきたなという風を感じています。我が家、お父さん、お母さんの価値観がその子の価値観を作ってしまったという風に思います。

例えば、言葉遣いですとか、ボイスですとか、言葉のキャッチボールの間ですとか、あとは態度ですとか、他者との関わり、距離感というものもすべて親御さんの価値観がその子の価値観になってきているなという風に思います。

4つ目です。3番と似ているのですが他者と関われない。関わったことがないからなのか。関わり方を知らないからなのか。そこは不透明なのですが、そうだとすると私は支援者ですので、支援者は言葉ではない。その人の行動から気持ちを推測する力を高める必要があるんだなという風を感じています。それは、日々の自分の中の課題だなと感じています。

5つ目です。母子分離不安、愛着と気質が母子分離不安に及ぼす影響がありそうだなと感じています。母子分離は、生後から、2歳、3歳の間に分離と分離不安と行ったり来たり繰り返す中で、確率されていると言われております。母子分離不安が達成しない限り、子の自立というもの、確立というのは得られなく、今も中学生、母子分離不安を抱えたまま。だから、

甘えなくなっちゃうんだろうなということを感じています。

関連して、愛着の問題もありまして、乳児と特定の人物との間につくられる愛情の絆が愛着と言われるものですが、これが一番根っここのところにあって基本的信頼関係をつくるもの。慣れ親しんだ家族。何でも受け止めてくれる家族の愛がないとやはり自立、子は確立しないのではないかなという風を感じています。

6つ目です。現代の子育てですが、先ほど言ったように密室育児です。そうしますと、育児の孤立化というものが出てきます。なので、必要なこととして、例えばお母さんの適度の気持ちのストレスの発散ですとか、子どもから離れてお母さん自身が自分で時間をコントロールできる空間の確保というものが、必要なんだろうなとは思いますが、例えば、子どもから離れるという風なことを考えた時に、お母さんってやっぱり、私、母親なのに、距離を置いていいのかしらとか。離したらこの子はどうなるんだろうとか。そういう風な今度はお母さん自身の不安感があり、現実にはやはり子どもから離れてお母さん、自分が時間を自由に使うというようなことはできていないような気がします。

今、挙げたことが私の中での不安です。こういったことを考えた時に、何でこういう不安がおきるのかなと考えた時、思った時にやはり親御さんなのかな。子どもの不安は親御さんなのかなという風に私の中では捉えています。じゃあ、どんな親御さんなのかなという風に考えた時、これは私の考えです。自分の事しか考えられない。今日は未熟だと表現します。未熟な親御さんがちょっと増えてきているかな。例えば、相手の気持ちも考えずに、自分の言いたいことをどんどん言ったりとか、いつも自分の都合のいいことばかりを言ったりだとか。まるで、子どものように、周りに気を使うとか。配慮することよりも自分のことを優先してしまう。相手の気持ちは二の次であったり、あとは自分の感情を押し付けてきてしまう。もしかすると、親御さん自身も何かの理由で精神的な成長が止まったままの状態なのかなとか。心が大人になりきれないまま親になってしまったのかなとか。子どもがいるので、親ということには変わりはないのですが親として、自信、安心してというか、親の意識を自分は持って親になったかというところがどうなのかなという風に思います。精神が未熟で相手の気持ちを汲み取れない親御さんの特徴を考えてみました。子どものことよりも自分の趣味や遊びに夢中になっていることが多いかな。あとは、大勢の目の前で感情的に突然、怒り出したりすることが多いかな。挨拶もあまり積極的ではないかな。マナーもちょっと自分流にアレンジしてしまっているかな。言っていることが、一筋通っているのではなく、その場、その場でコロコロ変わってしまってしまうこともちょっと多いかな。そして、収入に似合わない高額な買い物だったり、自分の遊びを優先してしまうことがちょっと目につくかな。親御さん自身が相手のことよりもやっぱり自分を最優先にして自分は大事という風なことが多いので、当たり前ですが親御さん自身もコミュニケーションのトラブルがあって、だから周りとは関わらないという風な連鎖のように感じます。そんな中で、子どもはどんな環境にあってもやっぱり親のことは、一番信じたい存在ですし、一番守ってほしい存在なので、どんな環境においても親元で自分はここのうちの子。ここのお父さんとお母さんの

子というところで自分を保つだけで精一杯の状態生活している子ももしかしたらいるのかなという風を感じています。成長過程の中で自分の身になって考えてもらった経験が圧倒的に少ないので、不安になって当然だろうなというのを感じます。その不安を抱えた子どもたちが受ける影響ってどんなことがあるかなと思い返した時に、コミュニケーションに多くの悩みを抱えています。価値観がその家流なので、学校という社会の中に来た時に、あまりにも大きな違いに自分がどうしたらいいのか分からなくなってしまって当然だろうな。社会の中で生き辛さを感じ、孤立してしまっているように感じます。あとは、相手の気持ちが推測出来ない。場の空気が読めない。大人になってからのことになるのですけれども、愛された経験がないので、親になっても自分の子どもにどう接していいか。その子をどう愛していったらいいかというのは迷うだろうな。そして、お金の使い方ですよ。やっぱり、欲しいものは欲しい。使わなきゃいけないことより、欲しいものが先という風なことになってしまうと、たちまち生活も不安定になっていってしまうだろうなという風を感じます。

幼少時代に親子関係の中から受けるはずだった対人関係や集団行動をうまく営んでいくためのスキルがなかった可能性が高いためかな。親としての能力が自ずと子どもに影響が出てしまうんだな。あとは、他者との適度な距離感や気持ちを察するといった心遣いや愛情の感じ方、愛情表現の仕方が分からないで苦労してしまうんだらうなと心配であります。

では、なぜ親が未熟で子どもっぽいのかなと思った時に、先ほどもちょっと言いましたが精神成長が止まっているのかもしれないな。親御さん自身が。発達の段階で2歳半から3歳というのが自我が成長し始める年代です。4歳から5歳というのが、自立心が芽生える発達時期だと言われます。自立心というのは、自発性、意欲、協調性、自我コントロール、我慢する力、競争心、人に対する思いやりなどを含めているそうです。この時期に親の関わりが不十分だと誰でもが未熟な親になってしまうのかな。だとすると、ここを補うことで、未熟でない親が増えていくのかな。ここをやっぱりちょっと自分の中で頑張りたいところだなと思っています。精神成長のために必要なこと。親からの十分な愛情や遊びや会話、スキンシップなどの関係を深める。前回の会議で、きりり園さんと長島保育所さんの方で、十分な遊びとか睡眠とか親子さんとかかわりのチャンスをたくさんつくってもらっているのを聞いて安心しました。そこに来ている親御さんはいいのですが、来れていない親御さんというのはいるのかな。いないのかな。いないとすればそこは誰がフォローするのかなというのが、次に自分の中で思った疑問というか不安でした。子どもの遊びの中から得られるものは、他者に関わることを知るんだそうですね。外の世界に対する好奇心が芽生えてそこから考えることや感じる心が育まれると言われています。ですから、たくさん外で遊んで丈夫な身体とたくさん経験でたくさんの方に関わってということで、やっぱり自己肯定感が自ずと確立されていくんだらうなという風を感じました。消極的育児とか親子関係が希薄、愛情が注がれないことでの影響は自立心を育てることはできません。途中で精神的な成長が止まってしまう心配があります。身体は大人でも自己中心的なところで精神成長が足踏みしているので、他者の気持ちを理解することはできません。つまり、自分と他者との関係をう

まくコントロールすることは、できなくなりそうです。未熟な親御さんへの対応を考えた時に、影響を与える。精神年齢。知らないのであれば、やっぱりこれを教えてあげるといふか。

気づかせてあげることってやっぱり必要なだろうな。それが本当に日常的なところで、シンプルに例えばそんなことを言ったら、相手はこういう風に思うんだよとか。そんなことを言われたら私だって嫌だよとか、そういった近いところでの気づかせる言葉がけをして行けたらいいのかなという風に思います。あと、約束、ルールを作るといふのもやっぱり教えてあげる必要があるかなと思います。誰にでも何らかの事情があって自分勝手したいのは分かるのですがその自分勝手が許される社会ではないですよ。自分の気持ちを優先してしまったり、相手の配慮ができない。そういったパターンだとしたら、やはり約束することを教えて、約束が守れなかったら、やっぱり駄目は駄目。いくらしてあげたくても約束にはないよとか。約束ではこうだったよということも具体的に話し、確認していけたらいいのかなという風に感じています。

以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。書ききれないくらいたくさんお話をさせていただきまして、ありがとうございます。それでは、まず、今のひとみさんからの話に関わってお話をされたことで、共感、共鳴する人もいらっしゃると思いますし、いや、その捉え方についてこういう面もあるのではないかといいところもあるのではないかなどそういったところまで、ひとみさんがせっかくだくさん話してくれたので、それを手掛かりにして、今の親の実態とか子どもの様子から伺えることといったようなことについてまずお話いただければ有難いかなと思います。では、京子園長さんいかがでしょうか。今の話を聞いて。いきなりふりますが。幼稚園で子どもたち、あるいは親と触れて。前にも話していただきましたが感じられることお話いただければと思います。

(佐藤幼保園長)

ひとみさんがお話されたことは、本当にそういう現実だなというところはすごく思っています。話の中に一つ幼稚園、保育所に関わっていない親御さんに対してはどうしたらいいのかというところで、実は私もいろいろ本を読んだりなんかしましたのですけれどもその中でやっぱり検診の場が一番いいのかなという風に私はそう思います。小さい頃からお子さんもそうですし、お母さんもそうですし、保健師さんが関わっているいろいろとその家庭の様子だったり、その発育の状況だったり、というところを確実に検診に来て下さる人ですけれども関わる事ができているので、その中でやっぱり親っていう気づきだと思うんですね。その時に気づいて、今の確かに、おひさま教室とかいろいろ保健センターさんでは取り組みを行っていただいているのですけれども、やっぱりその中をもう少し専門的な方と言いますか、そういう方を入れることによって早い段階で対応できるのではないかっていう風にちょっと考えたんですね。平泉町として取り組むという時に、一番ここが充実していればもしかすると、幼稚園、保育所で更にといいところで、深めていけるのかなという風な解決策、

という風なことが望ましいのかなと私の中では思っていました。というのは、うちの方で六マル運動を公開保育としてたいへん子どもたちも凄い笑顔で遊ぶようになりましたし、親御さんも本当に迎えに行ってもすぐ帰るのではなくて、園庭で子どもたちが存分に遊ぶのを待つという風なそういう姿にもなっています。本当に、先生方がもちろん変わったのがあるのですけれども子どもが変われば親も変わる。本当に、六マル運動参観日には、お父さんも来るようになりました。そうやって家族で、みんなが子どもの育ちを共有していく。そういう姿がみられるようになって本当に変わってきたなというのが実感しています。この子どもたちが小学校、中学校と上がっていった時に、きっとここで育った気持ちというのが勉強に向いていくのかなという風に思った次第です。

ですので、そうですね、やっぱり小さい頃から家庭にかかわっていくというところの体制があると本当はいいのかなという風にちょっとお話を聞いていて思いました。

(岩淵教育長)

はい。ありがとうございます。絡めていろいろな皆さんからお話をいただきたいと思いますが、今の二人の話を聞きながら考えてみたこと。閃いたことでも結構でありますけれども、どなたか何か発言いただければありがたいのですがいかがでしょうか。

(山平委員)

はい。

(岩淵教育長)

はい。山平委員、どうぞ。

(山平委員)

ひとみ先生の重要に思ったところですがけれども、まず親の意識を持って、まずここが確かに重要なところだと思っていて、ただ子どもを産めばいいということではなくて、きちんと育てられるかどうか。そういった状況、環境にあるのかどうかということも含めてしっかりと子育てに正面を向いてほしいなというところが一つと、未熟な親が増えてきているということで、確かにそのようなことは考えられますね。子育てが連鎖しているというお話ですが確かに親がどのような状況で育てられてきたか。それしか知らないわけですから、その通りにしかきっと子どもを育てられないのではないかと。ですので、自分たちだけの問題だけではなくて、それぞれの家庭環境をずっと背負ってきた環境が今の状況に陥っている可能性が高いなと思うので、その親だけを何とかしようとしても一番難しいところがきっと壁として出てくるのではないかなと思っています。

私が一番思っているのは、やはり子どもに対してのコミュニケーションです。どれだけ会話できているのか。たぶん、私自体、今、あまりできていない状況にあると思うのですが、どれだけ子どもに対して会話できているのか。それが子どものいわゆる言語能力だったり、いろんなことに関わってきていると思います。コミュニケーションを大切にしながら子育てを進めていきたいなと思っています。

それから、今、きりり園で行っている六マル運動というのは、やはり子どもが変わって親



も変わってきているという現実がありますので、これが一つになるのではないかと実感しています。以上です。

(岩淵教育長)

教育委員さん方から、続いてお話いただけないでしょうか。いかがでしょう。

(本澤委員)

はい。

(岩淵教育長)

どうぞ、お願いします。

(本澤委員)

本当に、ひとみさんのお話を聞いていて、やっぱり自分の経験も不登校児を何人も受け持った経験とか思い出して、本当におっしゃる通り全部、当たっています。この不登校児は、その子のケアじゃなくて、お母さん、母親のケアをすれば治っていきました。私の実体験、改善されていきました。やっぱり、確かに母親が不安定、子育てに自信がないというのが、本当にその通りにありますね。だいぶ前の経験かもしれませんが、過去も10年、20年前もそうですし、今でもきっとひとみさんがおっしゃっていたので、現時点でもあると思うので、子どもを産んで、やっぱりお話を伺って一番感じたのは、親の育成。それが絶対、もう早急に平泉町としても必要ということを考えましたから、それはどこが担当してどういうかたちをつくってそれにあたるかということになると思いますので、実は小学校の方は、教育委員会では、例えば幼小の幼稚園とのかかわりもあるのですが、こういう子どもを町として育てたいというのを幼保用と低学年、高学年、それから、中学生とあるんですね。こういう教育スタンダード、目標にするものが。その6歳までですか。幼稚園。6歳になってから小学生ですものね。0歳、生まれてから6歳までのやっぱりまちの平泉町はどういう風に子どもに育ててほしいし、そのためには親はどうしていかなきゃいけないかというのがまずそれがあると見えてくると思うし、これをやっぱり作るべきだなと。前々から、町長さんも0歳児ではこうやって資料を提供致しましたら、その平泉版を早急に作る必要がある。ありますね。とおっしゃって下さっていましたので、それを何とか具体化していけないかと。やっぱり、ひとみさんの現実的なお話を聞いて感じました。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。ひとみさんの最初の切り出しの話に対して同感という風な思いが強い方がほとんどいらっしゃるなということが分かったわけですがもう少しそこら辺について、それぞれの立場からお話をいただければ有難いなとそんな風に思います。

京子園長先生の方から検診の場というのは、非常に場面としては、いい場面だということで、関わるができるという風なことで、大事にしていければというお話があったわけですが、すけれども保健センターの穂積さんの方から何からそういう幼児の検診だとか、そんなところで見えてくる親の姿などがたくさんあると思いますがその辺も含めてお話いただければと実態として。

(穂積主幹)

保健センターの穂積でございます。保健センターの方では、京子先生がおっしゃった通り妊娠期から、出産、それから、赤ちゃんの家庭訪問だったり、検診だったりということで、まず、子どもたちの検診は、3歳6か月までの検診は保健センターの方で、実施しているところです。今、各種検診だったりとか、それから、子育て支援事業として、さまざまお子さん方の広場とか、ということで親御さんに集まっていたりしながら、実施しているところですけどもそういう中で、親御さんの様子といえますか、そういうところを見ますとこれは、私が感じているのですけれども、やはり、今、お母さん方は、ひとみさんがおっしゃる通り、やっぱり子どもよりもやっぱり自分のやりたいことを優先されているのかなど。検診などの様子などをみてますと、お子さんがお母さんから離れていくとちょっと見て危ないなと思うような場面があったとしてもお母さん方がそれを見てないでというか、そこで注意したりとか、危ないよということで追っかけたりとかというような、そういう場面がなかなか無いなという風にみえています。その変わり、お母さん方、スマホを見ていたりとか、逆にお子さんが泣いたりしている時にスマホを見せたりとか。すみません。こういうことを言って。そういうようなことをして対処しているお母さんもいらっしゃる。やっぱり、かわり方が分からないからそういうのを使ってお子さんをみているというような様子なのかなという風に感じています。で、やはりそういうお母さん方が増えているなということと、検診これはいいことかなと思ったことは、検診とか、さまざまな教室に参加するという時は、ご夫婦でお子さんとしてお父さん、お母さんと参加するご家族もいらっしゃる子育てを一生懸命やろうというような気持ちでお出でになっているというご家族さんもいます。やはり、そのこの家庭の状況ですとか、周りの環境ですとか、そういうところを保健師たちも見ながらお母さん方に声がけをしたりとか、ご相談があった時には、対処しているような状況は見取れるかなと思います。なかなか、若いお母さん方に、私たちも気づいてほしいなと思ながら声がけをしたりとかしているのですけれどもなかなか届かないといえますか。響いていかないといえますか。そういうところがあるのかなという風に感じているところです。子育ては、連鎖するという話をひとみさんの方から話していただきましたがやはり私も感じているところなのですけれども、これは話が違うかもしれませんが虐待の方の話からもありまして、やはり、お子さんが、親御さんがどのような育て方をしたかによってその子どもさんの育児だったりとか、愛着だったりとか、母子分離とか、そういうようなところの問題というものもやはりあるようですので、やはり子育ては連鎖していくものなんだなということは感じているところです。以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。それでは、少し、幼からちょっと成長した小学校の様子ということで、前回、長島小学校の校長先生に出席していただきましたので、佐々木校長先生、だいたい今までの話の雰囲気から、小学校の中でということで感じていらっしゃる場所をお願いしたいと思います。

(佐々木校長)

はい。引きこもり、そして少し学年を下の方に行くと不登校というようところが前回の資料にもあったようですので、そのことも少し話をしてみようかなと思います。幼稚園、保育所の先生がいらっしゃっていますので、今年の1年生という風なことで話をしたいと思います。今年の1年生は、運動がよくできます。それから、保健室の利用が少ない。学校行事、参観日、奉仕活動への参加がとても多いというところがあります。この運動がよくできるというところでは、我慢ができるというところが、ここ1、2年、2年生もそうなのでもできるなと思いました。それから、保健室の利用が少ないというのは、健康に留意させているということもあるようです。保護者さんがですね。虫歯もそんなに多くない。治療率もいい。歯肉の状態もよい。そして、欠席ゼロという子が44人中、今まで23人います。それから、1日休んだというのが14人というようなことで、44人中40名くらいの子がほとんど学校に来ている。大変、素晴らしいことだなと思います。長期で休んでいる子はおりません。さっきの行事についても2回とも授業参観には、全員参加しております。来ています。

懇談も5人くらいが帰宅したくらいです。奉仕作業も3回とも来た家庭がですね、14家庭です。32パーセント以上の14家庭。というようなことで、保護者になる。親になるというようなことは、社会への参加でありますよね。そうなってくると、学校行事等への参加というようなことはもっと大事なことはないかなと思います。そういう意味で、保育所及び幼稚園の教育というのがやっぱり実を結んでいるのではないかなというように思っております。

一方ということで、これはいつの時代でもそうかもしれませんがやはり、差が大きくなってきているなという現実です。先ほど生活習慣のことを言いました。ほとんど協力してくださるのですが残念ながら虫歯だらけの子もおります。それから、お箸のこともそうですし、食べ物の食べ方、好みなどということも大きな差があるなという風に思います。その家庭をみると、やはりなるべきしてなとしてしまったのかなというところも残念ながらその通りではあります。そういったところが一番のところかなと思います。あとは、子どもたちは随分元気に登校してくるようになってきたのですが、1学期中送られてきた子が二人います。2学期は改善されているのですけれども、もしかして3年生、4年生、中学校へ行った時に、あ、あの時の子かなというようなことがあるかもしれません。泣き叫んでいる子が一人おりました。この子は、今はいいけれどもまた学年が上がっていくにつれて、あ、そうだったかというようところかもしれないなど。愛着についての障害があるのかなというのがあります。

少し、こんなことはいかがかなと考えてみたところがありました。一つ目は、就学前の情報というのを共有する必要があるかなという風に思います。1歳児の辺りで、発達障害等を見るツールなども1歳半からできるようなものがあるようなのです。というようことで、発達障害と子育てのしにくさというようなもの関係あるようですので、そこら辺を共有していく必要があるのではないかと。児童、保護者、行政、そして、医師というところで、情報

を共有していく必要があるのかなと思いました。2つ目は、皆さんが話をしている親になる機会っていうのは、やっぱり持つ必要があるのかなというように思います。発達障害、何でも言っていますが、その子に対してのトレーニング、保護者に対してのトレーニング、ペアレントトレーニングということで、まちの方でもされているようですけども、今度は発達障害の子どもを育てた保護者にも参加してもらおうということもあるのかなということです。スマホ、メディア、これについても、本澤先生が話されたように、会津にはあいづっこ宣言というのがありますけれども平泉っこ宣言のようにですね、生まれたらこうしていきますとかですね。こうしていきたいですというようなですね、そういうようなものがあってもいいのかなと思います。メディアとスマホについては。それから、最後に社会への参加の仕方ということで、保育所、幼稚園への行事に積極的に参加し、それをそのまま小学校では更に受け継いでいくというようなことがあるかと思えます。最後に、やっぱり、小学校は勉強させるところです。ですから、不登校も学習の不適応になる子もやっぱり、学習指導を通して学校に来させる。というようなそういう気概は職員には持たせたいなというように思っております。260名の子どもたちがいて、不登校の子、今3人おります。ですから、257名の子どもたちは、一生懸命学校に来ているところです。そこに、職員の力をもっともって向けさせたいというのが、私の仕事でもあるかなと思っております。この子どもたちも大事にしていきたいと考えているところでございます。ちょっと長くなりました。ありがとうございました。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。相対的に小学校1年生の例を出していただきましたが、相対的には、非常にいいかたちで学校生活を送られている。だが、格差の広がりというのはやっぱりある。それは、少ない人数であってもそういったことは、やっぱり、今、本当にここで問題にしているのはまさにその部分でありますので、大事に考えていかなければならない部分で、一つの提起をいただきました。ありがとうございました。ここまで、お話をいただいたわけですが他の方々から委員さんあるいは、他の公所の方々から何かご発言があればお願いしたいなという風に思いますが、いかがでしょうか。

(千葉保育所長)

はい。

(岩淵教育長)

どうぞ。

(千葉保育所長)

前回の会議の時に、不登校のお子さんがいるということで、であれば保育所で何ができるのかなと考えたところだんたんです。長小の校長先生から母子分離不安の課題があるということのお話をいただきまして、昨年度の年長児の中で、やっぱりお泊り保育をした時に親御さんがなかなか心配されて帰らなかった。それで、子どももそれにつられていつまでも泣いていたというケースが見受けられました。でも、お母さんにはもうお帰りくださいという

ことで子どもはどうか次の朝、子どもたちと一緒に頑張れたんですけれども、そのお子さんが小学校に入ってから、ある先生からちょっと遅れてお母さんで行っていたところを見たとき、あれまだ難しいのかなと心配してたところでした。保育所では、できるだけその子のいいところを伸ばしてあげようということで、年に1回は必ずみんなの前や保護者の前で発表する時に、何か主役的なものをなれる。主役になってもらうということで、前に立たせて行動するとか、発表するとか。そういった機会を見つけてできるんだよというところを育てているんですけれども親御さんがどうも手をかけ過ぎているのかなというところが見られました。あとは、ひとみさんの未熟な親が増えているというのは、私たちも日ごろ感じているところです。こちらがやってあげていることに対して、「ありがとう」というところもなく、ちょっとしたミスを指摘されるというか、そういったところが、指摘されたところは、仕方ないから受け入れるとしても、少し見ていただけないかなと感じるところはあります。母子分離不安については、何とか保育所でも対応できるところはやっていきたいですけれども、親御さんのそういった生活習慣の乱れとか、親御さんの未熟なところとか。そこまで、なかなかこちらで難しいなと日頃感じているところです。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。それでは、もう少しお話を続けていただければと思いますが今までお聞きしていたことも含めて感じられたこと。考えられること。お話いただければ有難いです。いかがでしょうか。出ない時には指名をしたいと思いますがいかがでしょうか。

(青木町長)

はい。

(岩淵教育長)

お願いします。

(青木町長)

保育所、幼稚園、小学校、ひとみさんのことですが、保育所は保育所、小学校は小学校、ひとみさんには、ひとみさんに。私、家庭の親の方々、保護者の人たちが、実は今こういうことで悩んでいるんだとか。こういういうのは、どうしたらいいのかとか。例えば、うちの子どもいじめられているのではないかと。いじめているんでないかと。そういうご相談というのは、あるんですか。現場では。結構そういうのありますか。親御さんからの。それちょっとお話いただきたいです。

(佐藤幼稚園長)

平泉幼稚園と平泉保育所ですが、毎日連絡ノートのやり取り等もありますし、それから、あとは年2回の個人面談っていう風なことで、親御さんのかかわりの時間というのは、もっているのですがその時に、出されることもあれば、あとはやっぱり日常生活の中で気になったことがある時には、親御さんの方から話があってそれに対してどうするというところで、対応していくというかたちで進めてはいますが、今のところは大きな問題等は出されてはいないような状況です。

(青木町長)

大きくなくても結構そういう相談というのは、例えばこういうところどうしたらいいか先生とか。

(佐藤幼稚園長)

そうですね。

(青木町長)

そういうのは、結構あるのですか。

(佐藤幼稚園長)

一つ例を挙げれば、今時期的に小学校の就学へ向けてということで、年長の親御さんが気にされている方がやっぱり数名おまして、やっぱり悩めます。それは、もちろん何がいいかというのは、親御さんも分からないですし、そのお子さんがどういう風に成長していくかも分からないですので、揺れ動くといえますか。そういったことで、担任の先生と何度かやっぱりお話をして、担任の方も何回も何回も時間を取って丁寧に関わって、で、気持ちが落ち着くのを待ちながら進めていっている状況が今、実際には。ただ、親御さんもやっぱり、心に何か持っていて、判断、自分の中では決断はしかねて誰かに頼りたくなってということで、担任の先生のところに何度か来る状況にはあります。

(青木町長)

昔であれば、幼稚園、保育所に行っても誰もまだ字を書けない。名前書けない。ところが、隣の誰ちゃんはよく書く。なに、そんなの小学校に行ってから習えばいいんだよと。俺たちの時にはね。幼稚園で、名前を書けるように教えたりする場所ではないんだよ。保育所はね、元気に遊んで。そういうのを気にするというのですか？例えば、就学前というのは。

(佐藤幼稚園長)

そうですね。そういう方も中には、いらっしゃるのですけれども、それはその子の発達の段階というか、興味関心があればこそ、いろんなそういったいろんな文字や数字とかに興味を持てば、一生懸命覚えたりとかするのですけれども、それも人それぞれですので、まあ慌てなくてもいいですけれども環境は整えてあげましょうとか。そういったアドバイスのことはしています。

(岩淵教育長)

今の京子先生の話では、そういう悩みではなくて、別な部分の訴えとか、アドバイス、ちょっと具体的にどういう場面がありますか。

(佐藤幼稚園長)

そうですね。この子育てに関してのですね。若干、今日はお腹が痛くて行けませんとか。ちょっと危ないかなというケースの相談っていうか、お子さんが言って、でもその親御さんはあまり問題視なくて、担任の方が悩んでといったケースとか。あと、日々いろいろなことで、あとは友達同士のトラブルで、その親御さん同士の関係っていうところでの対応の仕方だったりとか、そういうことですかね。

(山平委員)

いいですか。

(青木町長)

はい。

(山平委員)

先日の公開保育のところで少し見えたのですが、一人ぼつんといる子どもがいて、後で周りの子が近寄ってくる場所があったのですけれども、ああいった子どもの親がどういう風に思っているのかというところが、現状を把握しているかどうか分からないですけれどもそういった子どもに対して例えば小学校に入る時に本当に大丈夫なのか。そういった不安があるのではないのでしょうか。

(佐藤幼稚園長)

一人でいたのは、男の子だったと思います。

(山平委員)

はい。男の子。

(佐藤幼稚園長)

そのお子さんについては、家庭的に問題があるお子さんでもありまして、日頃から気をつけている親御さんの方に問題があるというお宅のお子さんだと思います。担任の方も日頃からちょっと休みがちだったりするので、家庭の方にも連絡を取って「元気ですか」とか、「どうしましたか」ということと、必ず子どもさんを電話口に出してもらおうという風な対応をしたりとか。問題にならないように園の方では対応をしているケースもあります。

(岩渕教育長)

よろしいですか。

(山平委員)

はい。

(佐々木平泉小学校校長)

小学校は、相談がよくきます。特にも、何とかされたような気がするのですけれどもというような相談が特にもよく聞きますね。いじめられているんじゃないとか。とっても役に立っていい相談だと思っていました。それから、何とかしているというのがこちらから電話しているところです。逆に、こんな事実があったんだけど、うちでは知っていますかとか。

そんなことは、電話して悪質な場合は、学校に来てもらって指導を受ける。保護者も含めてですね。指導を受けることになります。あと、最近は地域の方からの自転車乗りが少し乱暴だったから、注意していたとか。注意したとか。こんな発言があって、怒ってしまったとかですね。そんな話も聞きますので、「ありがとうございました」というところで、話は話しているようです。細々な内容については、毎日担任の方に出すノートがありますので、それで相談を受けて対応はしているようです。

(岩渕教育長)

ありがとうございました。そろそろ、後半の方に話を進めていきたいと思いますが、前半の締めくくりで教育委員さん、三澤委員、それから三浦委員にまだご発言がないので、今までのお話を聞いていて感想でも結構ですけれども、あればお願いできればと思います。いかがでしょうか。

(三浦委員)

はい。

(岩淵教育長)

どうぞ。

(三浦委員)

多岐にわたるので、何をどのようにという、今日、方向性、どのように方向性をもっていったらと思いつながらお話をお聞きしていて、もちろん子育ての連鎖というのは、昔から自分が育てられたように育てていくということしか、なかなかできないことですし、それから、親というのは、最初から親ではなくて未熟なだけけれども、子どもを育てる中で、子どもの成長を見て自分も変わっていったり、子どもといろいろやり取りする中で初めて親になっていく、親の成長っていうのもあってそうやって親になっていくのかなというのが昔のいかたちなんですけれども。ただ、今は、なかなか難しい。前に山平委員さんが、若い人たちの考え方が変わってきていますという発言があって、今日もひとみさんの話の中にも、ある程度の年になってもなかなか未熟である。そして自分が中心になる。子どもよりも自分が中心になるという考え方の親御さんが非常に増えてきているというようなご発言もあって、そうだなと。人がなかなか成長しきれない世の中になってきて、なかなか大人になりきれない部分がかかなり大きくなって若い人たちの中では、大きくなってきているなという風に思うので、そこにどうやって私たちがかわかっていけるかということがやっぱり、一番どうやってかわかっていくか。考え方が違っている人たちの中にどのようにしていったらいいか。

さっき、京子先生の方から子どもが変われば親も変わってきているというのは、すごくそれはとても素晴らしいことだなと思ったんですね。保育所や幼稚園で、さまざまな活動を通して子どもが変わってきていて、それを見ている親も変わってくるというのは、本当に私たち幼稚園とか保育所とか小学校とか中学校、学校の中で、できることは、子どもを変えることによって周りを変えていくということが最大限できることなんですけれども、ただ、本質は複雑というか難しくなっていて、ネット社会になってきているので、親がなかなか他人と関わらない、関われないという難しさとかまとまりませんけれども、何というか、親の問題がやはり大きいなと思って。一番大事なのは、親子のコミュニケーションだと思うんです。基本は、親子がきちんと親子である。親子のかかわり合いをきちんとクリアしてくれば、どうにか子どもは、人とかわつたりとかする方法なんかは覚えていくでしょうし、何かいろいろなことを乗り越えられるかなと思うのですが、そういう風に親子がきちんとかわる方法をどのように私たちが、親に働きかけ、教えていくか。親が学ぶ機会を私たちがどのように設定できるかということが、行政の課題かなという風に思いますが、まとまり



ませんけれども。それで先ほど京子先生が検診で専門家をそこで入れて早めに気づく。親も気づく。あとは、定期的に親御さんに親としてどうあるべきかというようなことを学ぶ機会を行政の方で、学ぶ場を設定していく。来る。来ない。は別にして、専門家で素晴らしい専門家がいっぱいいますので、保育園の先生方とか、それからお医者さんでもこの間、平泉小学校に来ていただいたネットの専門家もいらっしゃいますし、そういう方々に招いていただいて、若いお父さん、お母さん方が子どもさんとかかわることはとても大事ですよということを教える場が必要かなという風に思いました。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。それでは、三澤さんいかがでしょうか。

(三澤委員)

親がしっかり、子育てについて学ぶ機会を行政が提供するというのは、大事なことだというようなことを三浦先生がおっしゃっていましたが、私もそこに行きつくような話を今までも何回もしているんですよ。今は、もうなくなりましたけれども、28年度、29年度、30年度までやったかな。長島地区と平泉地区に分かれて教育懇談会、それから、この総合教育会議でも子育て支援のテーマ、3回くらいやっているんですけども、結局そこに行きつく話しかできなかつたですし、やっぱり、今も思いは同じなんですね。親がしっかり学ぶ機会をとということと同時に、実は子どもはですね。私の考えはですよ。良くも悪くも育つのも自分の親の影響だけではないような気がしてきたんですよ。やっぱり、よく言われた同居したおじいさん、おばあさんの影響が大きい。だけれどもその他にですね、学ぶ機会というのは実はさりげない近所付き合い。それから、同じ子育ての立場にある親同士の学びあいの機会。学びあいというと、大袈裟ですが、実は遊びでもいいんですよ。子どもを連れて親同士の交流の場、そういったものが非常に私は大事だと思うんですよ。だから、そういったところから、今度は、親だけでは子どもの育て方にどうも躊躇している場合とか、あるいは、非常に分からないという場合に、いろいろなさりげない話し合いの中から、そういったヒントがどんどん生まれてきたりする。そこから、話をもっともっと発展していく。そういう風な場というようなものは、是非とも行政の立場からだと言えるのではないかなと思います。保育園とか、幼稚園も貴重なそういった場であることには違いないですが、こんな話を言うと本当申し訳ないのですが悪く思わないでください。やはり、保育園の先生方だけとか、幼稚園の先生方だけでは、とてもやっぱりいろんな問題をクリアするためのさまざまなご助言とか、行き届かない部分が、忙しさとか、いろんな部分ですよ。あるいは、長い人生経験が、本当に失礼な話ですが、長い人生経験がまだまだのスタッフもいらっしゃるので、非常に今後の子どもたちが育つためにそういった教育施設、保育施設だけでは、限度があると思うんです。そういった時に、やっぱり地域というようなものが非常に貴重な親が育つ場。子どもが育つ場としては、かけがえのない場所だと思うんですよ。結論は、行かないんですけども、例えばですね、せつかく子育て支援センターというのが保育所にあるということであれば、もっとそういうところを有効活用できないものかなと。面積の問題では

ない。これは、やっぱり我々教育委員会のスタイルとしては、私の考えとしては、社会教育行政と子育て支援センターとの融合でもって、非常に今まで困っていた分野が助かることも出てくると思うんですね。そうですね。そういった全ての行政が関連する行政が、今まで私が言ったことあります。全部、一元化してやった方がいいのではないかということをやったことがあるんですが、やっぱり、なかなかそこら辺まで一気に行くのは、大変だと思います。したがって、社会教育の公民館なら公民館、社会教育行政分野のところと、そういう支援センターみたいところがタイアップして、今の問題点をクリアするために、持続可能な事業や活動を展開していくという風なことは、一つあってもいいんじゃないのかなと思います。何だかまとまらない話になってしまったのですが以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。残りの時間といたしますか、これからどうするかということに、どこまでまとめられるかというのは、自信がありませんけれども話を進めていきたいと思えますけれども、今までのことを整理して、ひとみさんから未熟な親のこと。親の孤立の問題とか、そういったような中で、親自身がいわゆる親として育っていないというそういう実態がある。そういう風なことをお話していただきました。そういったことを受けながらそれぞれの幼稚園、保育所、学校、小学校で親の姿としていい面もあるけれども、これから、まだまだということについても話が合ったわけですが、それから、一つは、いわゆる町全体的な取り組みとして例えば本澤さんからは、スタンダード。小・中のスタンダード作られているんだけどそれをもっと幼児の分からということで、こういう風なことをみんなで心がけて、子育てしましょうという風なそういう思いであったり。あるいは、会津っこ宣言というような福島会津にはあるんですけどもということで、校長先生から話がありましたが、そういったものの平泉版みたいなものでもってPRしていくというようなそれを一つの目標に考えてというお話もありました。そのことは、それはそれとして、これは作ろうとすればできることだろうと思えますし、そういうものを掲げると一つはということで、繰り返し、繰り返しそういったことをPRしていくということが大事だと思いますが、それはそれとして、これから少し考えてみたいと思えますけれども、問題はと言ったらいいか、それだけなかなか変わるというようなことはなかなか難しいという風に思うわけで、そうするとどうやってその親が親として育つような、そういうようなまちにするかという時に、まず一つは、親に気づかせるという場、あるいは親同士が語り合う中でという風なことで、親の意識を変えていくという風なこと。そして、もう一つは、親が学ぶ場面というのをいろんな機会、例えば、行事であれ、検診であれ、あるいは、講演会であれ、それから、懇談会であれ、いう風な場があるだろう。それをできるだけきめ細かに定期的にという風なかたちで、積み上げていくことによって親同士が学び合ったり、あるいは気づいたり繋がることではないかという風なお話もありました。いうようなことで、話は進んできたわけですが、前回の総合教育会議の中でも資料をお配りされていると思えますが、例えば本澤委員さんからは、地域のサポートグループが育つことという風なことを持って地域ごとにそういう親

たちへアプローチするというそういう仕組みというのは、いいのではないかなと。それから、三澤さんからは、子育てサークルの育成という風なことを進めながらベテランの地域にいる方々に力を借りて親の学びを深めていくという風なこともあっていいのではないかな。いう風なことが話されましたし、山平委員さんからは、今の時代の親たちというのは、変わってきているということの中で、現代に合った支援という風なものをどういう風に検討していったらいいのかというお話もあったりしました。それから、三浦委員さんからは、やっぱり専属の方というか、そういった方が相談にのるといような、そういったようなことも大事ではないかな。そんな風なことをお話されました。その他にも各課長さん等々からもお話があったわけですがそういったこともふまえて、これから、今の困り感を持っているあるいは悩んでいる。あるいは親としての自覚というものが今一つだという風な方々をどのように本来の意味での子育ての姿という風なことで、考えていくそういう親になっていただくためにという風なことでの話を後半進めて行きたいと思いますが、この件について今まで話し合いをもとにしながらご発言をいただければありがたいなと思いますが、いかがでしょうか。

どうぞ、ひとみさんの考えをお願いします。

(阿部適応支援相談員)

ありがとうございます。今、在宅で家にいる子どもたちに就学の子どもたちと考えた時に、ほとんどが保育所に月齢が早いうちから入っています。その保護者を対象に学ぶ場といった時に、現実問題難しいんじゃないかな。学ぶ場を設定したとしても仕事ですよ。夜というのは。みんなお仕事ですよ。だとすると、保護者とかかわれるチャンスというのは、検診もそうですけど、やはり、日々の送り迎えの保育所、送迎地の対応する職員数を増やしてもらうとか、その送迎の時に誰ということなく、どの保護者さんともやり取りできるスタッフの配置というのは、どうなのかなと思います。前回もちょっとお話をしたのですが、赤ちゃん訪問をし始めた時に、まだ保育所に入れる前のお母さんたちは、私は見たことはある。でも名前を思い出せないんですが、そちら側は、「あ、家に来てくれた人だ」ということで、子育て支援の活動に行くと近寄ってくれます。それで、「大きくなったね。何か月になった」という話から切り出すと、やはり何かしらの不安まではいかななくても、「最近こうなんです」とか。「これって、発達として当たり前なんじゃないかな」とか。「私は、こうなんですけど、例えば主人はこうで」とか。「どうしたらいいんでしょう」みたいな話っていうのが本当に出てきて内容によっては、保健センターの検診の時に相談してみた？とか。いうこともあるんですけども、こういうことを相談していいのかな、どうかとか。何か不安なことないですか。検診の時言われたけど、「ないですかと言われたことに動転して忘れてしまうんです」とか。やはり、特別なことではなく日常的なところの支援というか、対応が私が若いお母さんだったら、そこを求めるなという風に感じていますし、この間も京子先生にお世話になったのですが、子どもの園での様子を伝えてもらうことで、そうなんだな。うまくいかないんだなとか。家でどうだったと聞かれると、今朝、確かにこんな感じで送り出したから、園生活うま

くいかなかったんだな。昨日どうだったと次の日送って行った時にそんな風に思いました。ということ園での生活を知っている先生と近いところで確かに今忙しいので、連絡帳でのやり取りだと思うのですが言葉を介してやり取りなんだなというところで、人と人のやり取りなんだなと、私は安心して園生活行ってらっしゃい。行きたくないということは、一度もなかったですし、叱られてもやっぱりみんなとやっっているいろんな活動をして楽しいんだなと。先生だって怒るでしょうと言ってもなぜ叱るかということも分かるところで、かかわっていただけたんだなと。ただ、今それがすごく早い段階からとなると、仕方がないと思うんですが預けられるのが当たり前になったりとか、預けることが当たり前になってしまっ、親御さんが気づける場があるのかなと思います。園では、先生がフォローしてくれても、園じゃなく小学校へ行った時に、今まで保育園の先生がフォローしてくれたことをお母さんたちはフォローしてもらっていたことを分かっていたのかな。どんな方法でフォローしてもらっていたかを知っているのかなと思った時に、子どもはそれだけで不安になってしまうんじゃないのかなとか。前はできたのに、何で今できないんだろう。その違いを周りの環境が違ってそうなるんですけど、それを子どもの力だけで何とかしろというのも可能なものと、やはり難しいだろうなと思うところがあったりだとか、話が取り留めなくなってしまうのですが、在宅ではなく、やはり保育園に通っている保護者対応をどうするかというところの方が私は切実なところでないかなという風に思います。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。何か京子先生、その辺についてご発言ありませんか。

(佐藤平泉幼稚園園長)

大変な大きな課題。実は、非常に思っております。保育所の先生方は確かにみなさん子どもたちを一人で数字的に言えば、0歳は、1対3だとか、1歳児は、1対6でという風なところでの人数配分で、職員配置になっているので、なかなかやっぱり、きめ細やかなというところは、やっっているんですけども行き届かなかつたりするところもやっぱり多々あるのかなというのは、現実です。今、ひとみさんからお話があった親への対応ができる人って言った時に専門でいてもいいと思うのですが、そうなればやっぱり保育士さんというよりは、そういった専門的な知識をお持ちの方がより親御さんのためにはなるのかなという風にはちょっと思います。長時間なわけですから、一人では難しいので、やはり数人のスタッフで対応するというかたち。もし、保育所で対応するというのであれば、そういったかたちでもっていくしかないのかなという風には思います。今のひとみさんの提案に対しては、保育所でやれるとすればそういったかたちになるのかなという風に思います。保育士さんたちは、やはり日々の生活のことでいっぱい、いっぱいなので、改めて保護者対応となれば何人かのスタッフでの対応ということになるとは思います。

もう、一つ言いたいのは自立。保育所、幼稚園の先生がかかわってきたことに対して、小学校に行った時にどうなのかというところなんですけれども、私もちょっと日常の先生方の指導の在り方を見て丁寧に一人ひとりかかわっていくのはいいんだけど学校に行っ

た時には、本当に親もいない。保育所の先生もいない。自分でやって行かなければならないところをやっぱり、年長の先生は特になんですけれども3歳の先生もそれを見越した援助の仕方、生活をしないとだめなんだよということを話をするんですがそこが親に伝わっているかどうか。っていうところの課題はあるのかなっていう風には、今、お話を聞いていてちょっと思いました。園だけで一生懸命そんなことをやっても、もしかして家では親が一生懸命なかなか自立できないようなかわり方をしていけば、確かに学校に行つてつまづくということはあるのかな。一点思ったので、それらを含み園としての在り方を考え直す必要があるのかなと思いました。

(阿部適応支援相談員)

そこが、やはり中学生になってこんなはずじゃなかったというところで、この間も面談したお母さんから、「お嬢さんは、どんなところが良くて、どんなことが苦手だと思いますか。」と聞いた時に、出てこなかったんですね。出てこない。例えば、「嫌だと言ってすんです。」って、お母さんが電話を早い時は、朝7時半くらいから電話がきますから、「嫌だ」と言っているんです。お母さんからは、聞きました。でも、中学生なんで本人から聞きたいということを書いて、あとお母さんが登校させるかどうかお願いしますということで、電話を切って、登校した後、直接生徒とやり取りをすると、微妙にやはりお母さんと話がずれていて、ちょっとやっぱり違うねって。お母さんは、こういう風に思っていた。それは、親だからあなたを可愛いと思ってあなたの思いとは違うかたちで、私に伝わってきている。自分の事は、やっぱり自分で言えた方がいいねということで、振り返りをしながらいくつか書きだしていくと、その生徒の場合は、嫌だと言っていたことは、実は不安なことが不安だとは気づかずに嫌だという言葉でしか表現できていないことが分かって、あ、「あなたは不安に思う時に嫌だという風に表現してしまうんだね。」と言ったことで、「あ、そうだったんだ。確かに、こんなことが心配。こんなことが心配。こんなことがあったから。」という風なところで、一つクリアになって頑張れることが一つ増えたというのが先週から今週関わっての生徒の成長だったんですが、親の思い込みとやはり子どもの実態でずれているところもありますし、かかわるものが違うとまた違った見方だったり、私がかえってできなくて、できないねという現実を見せてあげた方がいいというか、それが本人に気づかせるという風に私のところでは捉えています。できないからだめじゃなくて、何でできなかったかを探して行こうねだったり、そこができるようになるためにどんな風な方法があるかなということ子どもだったり、その親御さんと一緒に、考えていけたら自立していけるんじゃないかなと期待しているところです。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。今のお話は、いわゆる気軽に相談できる人であったり、場であったりっていうようなものを整えておくことによって、言葉を介して子どものことについて、あるいは親としての在りようということについて考えていただくという風なそういう問題だったなという風に思います。もう一つは、今日の話の中で例えば、極端な分かりやす

い例でいうと、例えばスマホにあやしてもらおう親。で、自分は親として子どもに向き合わずに勝手なこととか、したいことをしている親。という風な言ってみれば、未熟な親って言ったらいいか。親業をしっかり学んでいないという。そういう風な一部の若い親御さんたちをどう変えていくか、そのことが一つ大きな課題なのかなと。三浦委員さんからは、親子が関わる方法を教えるとか、あるいは、学ぶという機会をとかという風なこともありましたし、ひとみさんからは、いわゆるひにち能力と言われる自己肯定感を育てるとか、いう風なことも教えることがそういったことを大事だということを親が分かっていないと、まあ、連れまわして一緒に居酒屋に飲みに行くけれどもそれでおしまいということであったりという風な部分もあるわけですが、その辺について、どうアプローチしていったらいいか。どういう仕掛けをしていったらいいか。やっぱり、大きなこれから特にもすごく大きな問題として残るんじゃないかなという気がするわけなんです。その辺に対して、三澤委員からは、やっぱり、いわゆる地域ぐるみで社会教育も含めてでありますけれどもそういったようなことで展開していくかたちを作っていく。難しいことではあるんだけどもそういったことが大事なのではないかというお話があったわけでその辺について何か。

(三澤委員)

ちょっと補足していいですか。

(岩淵教育長)

はい。どうぞ。

(三澤委員)

さっきの行政の場合の関係部署が一元化するのは大変だし、あるいは今、希薄化した地域、これをまた時間がそんなに必要としないうちにまとめてそういうかたちにもっていくというのは大変だと思うんで、まずは、子育てに直接かかわっている人たち方同士とか、さっきも言いましたけれども、あるいはたまたま同じ趣味の同士で、若い子どもたちを持った同士で集まってそういったところをクリアしていくとか。いずれにしても子育て中の人と、それから子育ての子育て支援の関係者とお互いにしっかり合意形成しておく機会は是非必要じゃないかなと思います。今、問題になっているスマートフォンとか、テレビゲームの動画を見せておだけで、それで用足ししておこうというものは、まさに言語能力はまったく育たないし、もってのほかなわけですね。これから成長していくうえで。やっぱり、人の生の語りかけによって実は学力まで高めることができるんだよというところの話もあるんですね。こういったことを親たちにしっかり伝える必要がある。そのためには、やっぱり関係者、あるいは当事者と共にしっかり合意形成しておくことが大事だなと私は思います。

(岩淵教育長)

そういう適切な広場的なそういう場面というのを作っていくというのは、大変大事ですし、それに子育て中の若い親だけではなくて関係する方々も交じって、あるいは一緒にならなくてもそういった会合をいっぱいもつことによって、だんだん改善を図るかたちを取ることが大事だと思いますが、小学校の校長先生から例えば今年の1年生の親御さんたち

の参加は、100 パーセントだと。それから、奉仕活動にもいっぱい出てきてもらっている。懇談会で帰る人は少なかったという大変うれしいニュースだったわけですがけれども、そういったところにも見向きもしないとか、来もしない。さっさと帰るといふ方々もいらっしやるわけで、どうやってそういう人たちを取り込んでいくかということは、学校としての努力、園としての努力だけではなかなか済まない部分がある。まさに大きな町の課題になると思ったりしているわけですがけれどもそういった部分について、こういうようなかたちはどうなんだというような何かお話がある方がいらっしやればお願いしたいという風に思いますがいかがでしょうか。

(青木町長)

そのことだけではなくて、お話したいなと思います。ただ、私たちは、私たちの年代が多かったのは、保育所なんかで保護者の会とかいろいろ行事があったり、保育所でもお泊り保育でみんな準備して運営したり、クリスマスだと言えば、まんじゅう焼いて食べさせたらさまざま作ったりして、来れないところもあるんですね。園からもこういう話があったよというようなものも地域で伝えて行かなければならないです。と、いうのは、例えば今日行けないという時には、「大丈夫だ。俺たちがやる。」みたいな。こういうことが先生から話があったとか、今度伝える。先ほど三澤さんがおっしゃった保育所だけでは限度があるわけですね。それをやっぱり伝えながら例えばさっきのように用事あって帰ったかもしれない。俺そんなの参加しない。俺忙しいから帰るといふ人もあると思います。そういう人たちも、「実はね、あなたが帰った後に、こういう話があってこうだったんだよ。」と、いふようなことも、やっぱりそこ、そういう保護者同士で伝えて行く。そういうのが大事ではないかなと。大事だと思います。と、いうのはですね、やっぱり、いつも伝える人がいるわけですよ。近所だと。例えば、何回も参加していないと、この間こうだったよ。というのがないと、何回も言われると、行けない。行けないばかりではないなと。今度は一緒に聞いてみようかなといふやっぱりそういう誘い道にもなる。前は、いつも昔の話を言いながら今の話をこうやっていたんだけど。結局、今は、ゼロから始まるわけで、ゼロはないわけで、最初からゼロでやってる人は、あまり行事に参加しないでずっと続いて、3歳、4歳、5歳になっていくことも実はあると思うので。ところがむしろ保育所、幼稚園に通う時間が以前より長くなってきているので、そういう繋がりといふのを作る。今回なんかは、チャンスにしていくと、もっと繋がりが変わってくるのかなといふように、まずそのことだけに関して。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。なかなか、これやればといふのをここで決めると言いたらいいか。まとめるのは難しい感じがしているわけで、この問題今回で3回目と思っていたのですが、そうはいかなくなりました。ちょっと気がして、さてもう一回話をしてどういふ風に結論づけるのか永遠の課題ではないですけどそんな思いをしてみました。ただ、話をされてきたことについては、見えてくる部分もあつたりする気がするので、また整理をしていきたいと思えます。そろそろ時間が過ぎていくところですが、これだけは言っておきたいといふのを一言

ずつでもいただければ大変ありがたいと思いますがいかがでしょうか。

(三浦委員)

はい。先ほど、ひとみ先生が最近の若い先生がいらっしゃって、子どもたちのいろんな問題が、今、起こっていて、それがこれからどんどん増えていくと思うんですね。インターネットとか、ネットの社会は、これからますます発達していくと思うので、一人一人が孤立する状況というのが増えて行って、地域がまとまるということが難しくなってくると思います。で、ひとみ先生がおっしゃったように学校の行事に参加するということは、親になるうえでも大事なことだと思うんですね。自分の子どもの学校行事、幼稚園、保育所の行事に親として参加しなきゃという意識を持つことというのは、すごく親になるうえでも大事なことだと思うので、学校や各施設では、やはり親御さんに行事に参加を推進することが大事だし、人を育てるということは、その地域社会の最も基本の行政の大事な目標だと思うんですね。人を育てる。地域の人を育てるという一番大事な課題だと思うんです。で、やはり各検診、1か月検診、何か月検診ってあって、子どもについて、親御さんと一緒に専門家の方に見てもらって身体の丈夫な子、心の丈夫な子を育てていく。さっき京子先生がおっしゃったようにそこには、やはり専門家の方も交えて親子の関わり合いについても見ていただく臨床心理士さんとかいるから、そういう方も一緒に検診に入ってもらい必要があるだろうと思います。

それから、妊娠したならば、先ほど京子先生が今は若いお父さんが一緒に来る。それは、昔はなかったですよ。お父さんが来るというのは。ところが、今は、お父さんも一緒に来てくれるので、夫婦で、今の出生率はどれくらい分からないけれども年に一回は、その年、生まれたお父さん、お母さんが集まって、妊娠した。あるいは、出生、生まれた時にでも集まっていたらいい、出る。出ないは別にして親としてどういう風に子どもとかかわるかっていう勉強会を必ず年に一回は平泉町は開催した方がいいと思うんです。何でもやっぱり入学してしまうと、あっと思う。入学前が大事だと思うので、就学前の子育てというのがすごく大事だし、学校に入る前、社会生活を営む前の親子のかかわり合いというのをやっぱり教える場というのは、必要かなという風に思います。親子のかかわりがきちんとできれば、いろんな問題があるんだけども果たして子どもたちは、何とかやっていける気がするんですね。親子のかかわり合い、コミュニケーション、子どもを育てるとか、家族のかかわり合いって、一番面倒で、とっつもしんどいことだから逃げてしまうっていうのが、やっぱり逃げてしまって仕事とか、他のこととか、一番しんどいことからやっぱり逃げている。今の人たちは。たけど、一番しんどいことをやっぱり最初にやらなければならない。親は。だから、子どもとかかわり合いをきちんとするんだよということを教える場を必ず早めに行政として設定した方がいいのではないかなという風に思います。二点です。検診の場に臨床心理士さんを入れていただきたい。それから、出生したら、親子で勉強会に必ず来てくれる場を持つという二つはあった方がいいのではないかなという風に思います。

(岩淵教育長)



ありがとうございました。

他にどうぞ。

(三澤委員)

町長がせっかくいらしたので、今、三浦先生が言ったように、やはり人づくりというのは、町づくりのためには、本当に大事なウエイトを含めている。それと関連して、先ほど協働町づくりサポーター募集というのがありました。町では、これこそ、私はちょっと前に言ったような気がするが、やっぱり、こういったようなものに関わってくるそういったサポーターほしいなと思います。ついでに、言うのですが、協働の町づくりサポーター募集と言っても、もう少し具体的にこういう分野の人たちがほしいんです。あるいは、歯止めには草木ほうぼうしているので、この辺り何とか手伝っていただきたいとか、学校の校庭が鬱蒼としているから、この辺やってほしいとか、そういう風なサポーターと人づくりのためのサポーター、そのためにこういったものがあるんだと具体的なところを箇条書きでいくらか載せたかたちの募集ということでない、非常に漠然としていて、ちょっと大げさな恰好だから、私みたいなのはちょっと募集かけてもな。応募してもな。という風な何がなんだか分からないかもしれないですね。ちょっと具体的にもうちょっと踏み込んだ文言を入れると。

(岩淵教育長)

今の三澤さんのお話は、協働のまちづくりのサポーターとは別に人づくりのサポーターという組織をとということですね。

(三澤委員)

結果的には、そういう風にはなると思うんですね。協働まちづくりサポーターともいろんな分野があると思うけれどもやっぱり、いろんな子育て支援の部門もあるんだよと。とても大事なことだと思います。

(岩淵教育長)

その他に、何かご意見ございませんか。

(阿部適応支援相談員)

もう一言、言ってもいいですか。

(岩淵教育長)

はい。どうぞ。

(阿部適応支援相談員)

平泉の、平泉だけではないのかな。人は誰でも褒められると嬉しいし、褒められたことに、応えようとしますよね。褒められる。例えば、仕事で褒められちゃうと、子どもより、仕事に行っちゃう。家庭で認められるより、まちづくりで、認められちゃうと、そっちに気持ちが行っちゃって子どもは置いてきぼりというのがちょっと気になる。ちょっとあるかなということがありまして。やっぱり、お父さんもお母さんも、お父さんとして頑張っているねとか。お母さん、復帰してうまくいっていないにしても、こんあんこと頑張っているよねと認めてもらえることで、もっと子どもに向き合えるのかなと。やはり、求められる場を探し

て、人は動いてしまう。弱いものなんだなというのも日々の活動で感じているところです。もっと、褒めましょう。お父さん、お母さんを認めましょう。

(三澤委員)

やっぱり、そういう時は、子育ての方に専念してもらって。

(阿部適応支援相談員)

ですが、やっぱり、自分なんです。なので、本当に地域で頑張っている方、結構子どもが寂しい思いしているんだけどもなという方も今までの生徒でもありました。でも、やはりそちらを向いている時は、わが子はちゃんとやってくれているものと勝手な親の判断で、寂しいとは言えない子どもたちの実態があります。

(岩淵教育長)

はい。どっちも頑張ってもらいたいです。ありがとうございます。そろそろ締めくくりとして、課題は与えられたなと思いますけれども、ちょっと、ここですぐに整理はできないので、また、少し時間を置くと落ち着いて考えるとまとまると思いますので、そうさせていただきますけれどもこれだけは言っておきたい。まだ、多嘉男課長さんに全然振らないでしまいました。宜しくお願ひしたいと思います。

(千葉町民福祉課長)

私、町民福祉課の方で保育所の方と子育て支援の方で見ているんですけども、現場の方は割と保育士の方々等の伝わる資料はございませんけれども、皆さんに言ったのは、親御さんに対する育成が必要だということが一番多いようです。それをいかにして、できるかというのが一番の問題だと思います。ひとみさんが言う通り、やっぱり仕事に行っている親御さんが平日来てそういう学習会のような。ただ、保育所の方に専門員がいて教育委員会の方に相談にのってくれるサポーターの方を置くとってもこれも予算的に難しいところもあるので、それをいかにして、再建していくというのが今後の課題だと思いますし、今、保育所は町民福祉課でやっていますが、幼稚園は教育委員会。検診とかは、保健センター、この3つを役場の中での3つの課でやっているわけですけども、共同して取り組めばいいんだと話はあると思うんですけどもやっぱり、これがですね、一つとなって取り組みができれば一番いいのかなということで、私は思っています。以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。それでは、町長さんから、最後に一言、二言お願いします。

(青木町長)

まず、先ほど、各幼稚園、小学校、阿部ひとみさんの方で、相談ごとが結構あるんですかと実は質問させていただいたのは、実はいろいろ、前、三澤委員から出てましたが、子育てに関する窓口の一元化が今後必要になるのではないかとというのが以前、前回発言があったんです。自分もずっとこのことを考えている一人として、その中で、ここに例えば子育てを今真っ最中のお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんでもいい。俺の孫、こうなんだけれどもこんなんでいいんだらうかっていう人と、また、親御さんにすれば、私、どうした

らいいのか分からないんだよねというようなこととか、やっぱり出てきていると思う。直接、保育所だったり、学校だったり、阿部さんのところだったり、直接お話しに来ると思うんですよね。すぐ対応できることと、できないことといろいろあると思うんだけどそんな中で、まず、地域で保育所の先生は若い人たちだけだけでも、年配の方でそういう相談に乗っていただける方、何人かで地域で設置してですね、そのためには、本澤さんが今日もお話していただきましたが例えば1歳までは、こういうところを親御さんとしても教えていくし、やっ  
ていくし、2歳の時はこうとか、平泉なりのほしいんじゃないか。前、町長で言っていたという発言していましたが、そのことについて、はっきりしてほしいのは、親御さんたちにはっきりしてほしいのは、学校でやることは、さっき先生が言ったように勉強を教えるところというように、これは家庭でやる場所、そのことをきちんと明記して、例えば箸の持ち方まで書いてもいいから。箸の持ち方は家で教えろと書いていいから。例えば、そういったカリキュラムを適正にある中で、家庭でも役割というものをもっとしっかり、親御さんたちに伝える。それを活字でまず伝える。それを実践していくためには、検診なんかはよく有効だというお話もあったけどもその中できちんと教えていくこと。最近、特にも、さっき発言があったのですが、ご夫婦で参加する機会というのは、若い人たちは結構いますよね。今、家で稲こきで忙しいと言っても見向きもしないでそっちに行く。そういう世代だし、そういう意味では、関心だけはあるんですよね。ただ、どうやったらいいかとなった時に、二人で取り組むから恐らく揉める。本当は、片方だけでやれば揉めないんだろうけども、それはまた別としても、例えばそうした子育てのすぐ相談できる。そういうのをきちんと設置して、その中で相談できる。そこに相談できる。ただ、その委員というのは、幼稚園の先生とか、学校の先生とかではなく、地域でそういう風に、そういうことに若い時から子育てに精通している方とか、よく相談に乗ってお話ができる方、3、4人でいいと思うんです。そして、教育長、直々の判子付かなければ集まらないというのではなくて、相談なった時に、結局3日も1週間も経ってからあの時のことと言われてももうそんなこと終わったよと、今頃と言われてはならないから、即集まって、例えば4人の委員がいれば、今晚7時からちょっと家に来てよとか、役場のあそこ借りて集まってちょっとそのことで、小学校の校長先生にも紹介してみようとか、聞いてみようとか。やっぱり、そういうのを即、動ける。その体制を。それを、先ほど、多嘉男課長も言っていました、保健センターとどこどこがみんな一緒になってやれば一番いいんですけどもその方向というのは、おそらくその方向性では、まず私はなかなか難しいと思うんですね。もちろんそうなれば一番いいんでしょうが、それぞれの保管しているところで、情報をきちんと共有してからパッと集まる。ところが、今、お父さん、お母さんたちが就学前に求めているのは、「昨夜、うちでこういかなかったけど、考えてみたら何で言ったらいいのか知らないけれどね。」と、いったようなそういうのを総合的にですよ。設置して、動き出すというところがまず必要なのかなと。三澤さんがおっしゃっていたみんな社会教育とみんな繋げていくのは別としても、ずっとこの一元化をと何回も言っているのさっき三澤さんが言って言っていました、私もずっと頭にあって、そうい

うチームというか、そういうのを立ち上げて取り組むと直接今度、直接来た相談がですね、実はこの間、こういうご相談があって、こうだったという話その下に共有できたり、全くその委員さんが家庭の人とだけではなくて、その人たちがいろんな例を持ちながら話ができるとか。就学前、その辺が今後、あと中身的に実際どうやっていくかは、これからだと思うのだけど、でも、どこまでも、今年考えて来年やりましょうというのではなく、立ち上げるのは早く立ち上げて対応していかなければならない。そういう今もう時期になっているから、むしろ遅いくらいだと言われるかもしれませんが、即取り組んでいくというのが、その辺かなとちょっとずっと教育長にも内緒で考えていたところでありました。内緒の話を今日してしまいました。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。今のひとみさんの話はさっき出た人づくりのサポーターに繋がるかなという風に思います。問題はとってしまうのは、やる気ないと思われると思いますがその人材をどう集めるか。本当に、無料ボランティアみたいな感じになってしまうなど思うんですけども、そこいら辺りについてはまたこれから考えていかなければならない問題だなと思いました。ありがとうございました。予定の時間よりも20分以上オーバーしてしまいましたけれども、今、出されたさまざまな視点での問題点、課題というのは、また、推理をして、そして再度皆さんにご提示申し上げてご意見をいただくというようなかたちで、新たなかたちで動き出すのは、令和2年度という風になるんだろうと、そのように思いますのでこれからもこういう機会だけではなくてフツと思いついた。あるいは、考えたということがあればご意見を賜りたいと思います。それでは、協議の方を中途半端のかたちになりましたが。

(千葉教育次長)

ありがとうございました。

4番のその他ですが、何かこの際に別件等、特にお話をしたいこと等を頂戴したいと思いますが、宜しいでしょうか。

それでは、これをもちまして令和元年度第2回の平泉町総合教育会議を閉会致します。大変、お疲れ様でした。ありがとうございました。